

# 相談室たより 2014年11月号

みさき病院  
MSW 三宅

寒さが日に日に身にしみる季節になってきましたね(´▽`)

早いもので、今年も残り50日を切りましたね・・・

みなさんは、今年どんな1年でしたか？

私は、3月号に記載したように、地域へ出向くことが多い1年となりました。その中で、今回の相談室たよりは、地域の方とチームを組んで支援した症例の第二弾を報告します。



## ～認知症高齢者の独居生活の支援を地域で考える～

### ▶Aさん(80代 男性)

Aさんは、介護サービスを利用しながら、独居生活を送っていました。自動車の運転もしており、隣の県の間部へ水を汲みに行くことがAさんの楽しみで、定期的に行かれてありました。

しかし、徐々に物忘れが進行し、水を汲みに行き帰り道がわからなくなってきています。また、飲酒運転も懸念される状況で、免許更新の時期を迎えました。本人は運転を継続したいという思いがありますが、別居のご家族は更新をさせたくないという思いがあります。自宅周辺は学校の通学路でもあり、事故の心配も出てきていました。

そこで、Aさんに車が無い生活を営んでもらう時期ではないかということで、MSWの介入が始まりました。まずは本人との面接、次にスタッフやCM、別居のご家族との情報共有などを行い、院内の支援だけで解決できないと考え、地域包括支援センターに相談。地域での個別ケース会議を開催し、地域コアメンバー会議でも事例検討を行っていききました。

その中で、6月より道交法が改正される情報が入り、私は早速公安へ訪問し情報収集。公安から高齢者の自動車運転に際しての相談窓口が県公安内にあることを教えてもらい、県へ連絡。県公安との連携の輪が広がり、高齢者講習や更新窓口に本人が来られたら連絡を頂く手配や、必要時医師への診断書依頼等の手配をしていただけることになりました。

同時に、ご家族も本人へ更新しないでほしいと説明し、定期的に訪問されてありました。その結果、本人自身更新をしないということで納得され、車の無い生活を送ることになりました。

通常であれば、ここで個別ケース会議が終わることもありますが、Aさんの場合は、物忘れが進

んでおり、車がない状況での独居生活をどう支援していくか会議が継続していきました。(Aさんがアンハッピーにならないように・・・)

そして、更に地域での支援の輪が広がる機会となり、最終的には、「民生員」「地区の役員」「包括支援センター」「CM」「介護事業所」「病院」「親族」「親戚」また、徘徊SOS事前登録等も実施することになりました。

Aさんの楽しみである水汲みは、ご家族が月1回一緒に行くことになり、Aさん本人と話した際には、「家族と一緒にいき、帰りに温泉に入ってきた」と笑顔で話される場面がありました。Aさんの生活を支援する課題は、まだいくつかありますが、車の運転が出来ないことでの大きな混乱には至らなかったのは、地域で支援を考える過程があったからではないかと思えます。

今回の症例では、ケース会議やコアメンバー会議で、在宅生活継続するための様々なアイデアがでて、「じゃあ私は〇〇します(できます)」など出来ることを提案していき、支援者同士がプラスの方向で動いたことが印象的でした。相乗効果として、ご家族は、当初介護負担や精神的負担に悩まれていましたが、支援者の輪が広がり、負担軽減に繋がり、ご家族自身からも前向きな発言も聞かれました。

### 終わりに・・・

これから、地域包括ケアシステムが各地域で構築されていきます。親仁会(民医連)らしい『無差別・平等の地域包括ケア』の実現を目指すには、地域の支援チームの一員として自分達が関わっていくことがポイントになってくるのではないのでしょうか。